平成29年度　西部地域療育センター連続講座（平成29年11月17日）

転移（投影同一化）について考える

― 子どもを理解するツールとしての転移 ―
（フロイトの精神分析理論を出発点として）

名古屋市西部地域療育センター　堀部 文男

＜要　約＞

◇新美南吉の思い◇　…生き物の心は通じあうことができる。別々に生きているように見えても、心の中で共鳴する可能性を持っている。悲哀を経験した他者を理解することで、悲哀は愛に変わり、心を通わせることができる――と考えました。そのことは『ごんぎつね』はじめいろいろな作品の中で表現されています。

◇フロイトの発見◇　…精神分析という営みをすすめていく過程で、次のような概念を発見（確立）しました。　A：「無意識」 B：「エディプス・コンプレックス」 C：「転移」（他にもいろいろありますが、今回は何とかこの３つをクリアしたいと思います。）

◇フロイトの後継者たち◇　…ユングは個人の「無意識」だけでなく、多くの人々に共通して働く「集合無意識」を想定しました。また分析の対象を重い病態の人にも広げました。アンナ・フロイトは、教育的な手法・考え方を、子どもの精神分析に取り入れようとしました。メラニー・クラインは、自閉症と思われる子どもに対しても積極的な分析を行いました。現代の精神分析では、分析場面での「転移」の解釈に関心を持って、治療的アプローチを試みていくことがひとつの中心的な考え方となっています。

◇日常生活・療育場面における「転移」◇　…人との関わりがあるところ、必ず、いくつもの「転移」現象が重なって生じています。『ごんぎつね』にも表現されています。日常生活をより豊かに、より意味深いものとして過ごしていくために、「転移」への理解を続けることは、関わりを持つ人と自分自身とが、お互いに成長していくために役立つことだと思われます。

１．新美南吉の人生

1913年、愛知県半田町で畳屋の二男として誕生しました。4歳の時、実母が29歳で病没。

6歳のとき父は継母を迎え、弟が生まれました。8歳の時、亡くなった実母の実家の養子となります。つまり南吉は、父・継母・弟らと別居し、血のつながらない祖母と二人住まいになります。寂しさのあまり、半年ほどで生家にもどります。16歳頃には童話や小説などを書き始めます。19歳で東京外国語学校英文科に入学し、巽聖歌、与田準一など若い詩人たちとの交流が始まります。『ごんぎつね』は19歳の時に発表されました。23歳で東京外国語学校を卒業。喀血は21歳の頃からたびたびあり、不景気なこともあって東京で思ったような職に就けませんでした。半田に帰り静養し、24歳の時に河和の小学校で、3か月間子どもを教えました。

25歳には安城高等女学校の先生になります。26歳

の時には、生徒たちの書いた詩を集め生徒詩集を発行しました。そしてたくさんの作品（童話・小説・脚本・童謡・詩など）を作りましたが、29歳（1943年）の若さで病死（喉頭結核）します。（注1）

彼は作品の中で、母親と子ども、動物と人間、友達と自分（主人公）などの間の気持ちを細かく描いています。例えば『雀』という作品では、「愛することと、愛されることに飢えていた私」は「決して自分には向けてくれなかった愛情」を雀に向けている母親に嫉妬し、まるで母親が幼くして亡くしてしまった彼女にとっては実子（私にとっては弟）にしていたように愛情を向けていたので、やがて「私が」雀に対して愛情と憎悪の両方を向けるようになった、といういきさつが描かれています。雀と人間の間には、はじめ警戒心があり、やがて信頼関係が芽生え、雀はえさをもらって、しだいに人との間でチュンチュンと声を交わすようになっていきます。

生涯をかけて追及したテーマは「生存所属を異にするものの魂の流通共鳴」であるとされています。南吉は、人と人の間、人と動物の間、それらの家族の間で交わされる心の交流を描き出しています。また「やはり、ストーリィには悲哀がなくてはならない。悲哀は愛に変わる」と悲哀を描くことを通じて愛を表現できると考えていました。自分の中にある満たされない気持ち、空虚になっている心を相手に向けて満たしたい気持ち、何とかわかってもらって愛されたい気持ちをいろいろな作品の中で表現しているようです。

東京外国語学校時代には、当時の日本の作家たちとの交流も深めましたが、モーパッサン（フランス1850～1893　代表作「女の一生」「ベラミ」）やD・Hローレンス（英国1885～1930　代表作「チャタレー夫人の恋人」）、K・マンスフィールド（英国　ニュージーランド生まれ1888～1923　弟が第一次世界大戦で戦死してから、故郷ニュージーランドで過ごした幼児期の思い出を素材に短編小説を多数、書きました。34歳で肺結核により死亡。）などの小説の翻訳も試み、作家修行だとしていました。ですから1900年前後の欧州の社会状況、人間の性と愛を描き、悲哀に満ちた人生を叙述した作品にも多く触れていたようです。また、南吉はカントの哲学にも関心を持ち、哲学よりも文学の方が人間を直接描くことができる、と友人に話しています。

2.フロイトの人生

1856年、旧オーストリア・ハンガリー帝国の小都市フライベルグ（現在のチェコにある）でユダヤ人の家系で、羊毛・織物商人をしていた父とその3人目の妻との間の子として生まれます。亡くなった一人目の妻と父の間には24歳の長男と18歳の次男がいました。フロイトを産んだ母親(20歳で結婚)は、長男よりも若かったのです。3歳半でウィーンに引っ越し。母親は家業の手伝いをしていたので、日中は若い乳母たちに養育されました。（実の母親に甘えたいけれど甘えられないという点では南吉と共通しているかもしれません。）17歳でウィーン大学の生命科学部に入り生物組織学を研究、26歳ごろ開業を目指して臨床研修を決意。（皮膚科医になるつもりだった。）29歳の頃、パリで盛んに行われていたヒステリー治療学に関心を持つようになります。（注2）

パリに半年間、行けることになり、ヒステリーの心理的基礎を発見したシャルコーという人の元で研修しました。ウィーンにもどってからは、友人の医師から経済的支援を受けながらヒステリー患者を紹介してもらい、治療を開始しました。ヒステリーの患者を治療するうちに、催眠と暗示に頼らなくても心理的治療ができ、症状が治癒することに気がついていきます。患者さんに自由に思いつくままに何でも話してもらううち、症状が改善していくという体験を重ねていったのです。この「自由連想法」が、精神分析を確立していくための出発点の一つになりました。

こうして1891年から1938年にロンドンに亡命するまでの47年間、一開業医として休みなく、診療生活を送る傍ら、精神分析の創始者として多数の理論・著作を残しました。83歳（1939年）で病死（上顎癌）しています。3人の息子と3人の娘がいましたが、学問的な継承者は末娘のアンナ・フロイトが引き受ける形となっていきました。

3.「精神分析」って何？

「精神分析」とはカウンセリングとか心理療法と呼ばれているものの一種です。そういった心理療法の最初に試みられたもので、フロイトが創始しました。現在あるほとんどすべての心理療法の元になったものです。だから、現在行われているカウンセリングや○○療法は、みなフロイトから出発したものの変形・応用であると言ってよいと思います。（「無意識」というものが人の心にあるということを前提としている心理療法では、という意味ですが。）そして「精神分析療法」という時、そのやり方、形式は厳密に決められています。

現在の日本で、本格的な精神分析治療をしている分析家は２桁ぐらいだろうと言われています。週１回のカウンセリングでは「精神分析的なアプローチ」はできても、「精神分析」とは言いません。週２回か３回以上の頻度で、分析治療を受けないと精神分析ではないとされています。フロイトは週に４回とか５回とか、あるいは毎日分析を行っていました。ですから生活療法と言ってもよいぐらい、生活をクライエントさんと共にするようなことになります。普通、最も親しい間柄であっても、週に２回も３回も、きっちり自分の考えたこと、心的に体験したことを相手に話すということがあるでしょうか、それも毎週毎週。何か月も何年にもわたって。

分析治療を行うには、分析家自身（医師または臨床心理士など）が少なくとも１年間は週１回のスーパービジョンを受けないといけません。総計○○回(３桁)を越えないといけないなどと規定があります。また分析家を養成する能力があると認められた先生のところに通わないといけません。１回に○○円を支払います。他にもいろいろなトレーニングを受けてその能力の証明をし、しかるべきところに認定してもらわないといけないのです。

フロイトは、精神分析は、神経症かヒステリーの人に効果があると考えていました。彼の弟子であったユングはもっと重い精神症状の人にも応用できると考えました。メラニー・クラインは子どもにも適用できると考え、実践していきました。対象は広がっていった

のですが、ことばを介して分析治療が行われるので、話しことばの使用は十分に使えなくても、少なくとも言葉の理解はできないと、分析家の言葉は対象の人に届かないので困難だと思われます。分析家は、クライエントの言葉や振る舞い、雰囲気などを受け止めて、理解し思い浮かんだ言葉の中から治療に結びつきそうな言葉を「解釈」として、クライエントに投与して変化を促します。

ですから、分析家の言葉による働きかけを受けて、自分の心の中で、いま言われたことは自分にとってどういうことなんだろう、と考えられる人が分析の対象となるわけです。あまりにも病態が深刻である場合には、分析家の言葉を受け止めることや、自分の心の中で考えることは難しいので、まず入院や投薬治療を行うとか、集団精神療法などに参加して、少し自分のことを考える練習（自分自身の心の動きを振り返る練習や準備など）をしてから、ということになるわけです。

以上のように精神分析を構成する要素はどれもハードルが高くて、簡単には越えられそうもありません。しかしフロイトは、自身が精神分析を進めていくうちに発見したことは、人間の精神の成長にとって、非常に価値のある事ばかりなので、全く利用しないのももったいないことだと思ったわけです。フロイトは正式な精神分析治療は「純金」だと言っていました。そして、精神分析の考え方を取り入れたアプローチは、必ず将来広がって応用されるだろうから、それは「純金」とは言えないが、「合金」として実践されるだろうと見通しを立てていました。必ずしも「純金」で無くてもいいんですね。人間の生活に精神分析が広く応用されることをフロイトは予想し期待していました。

４．精神分析の主な理論

Ａ）無意識と抑圧

フロイトは、心の局所論として、「意識」「前意識」「無意識」の３つを想定しました。

「前意識」は意識化しようとする意志によって意識化可能な心的内容の存在する局所であるのに対して、「無意識」は抑圧を除去する特定の操作によって初めて意識化可能になる心的内容の存在する局所であるとしました。

「意識」…お客の前で踊り子（バレリーナ）が演技する舞台。劇団の監督の指示のもと、統制のとれた動きをしています。お客（社会的場面）の前で、お客さんに満足してもらえるよう振る舞える踊り子だけが選ばれます。(踊り子…心的内容のひとつひとつを表しています。)

「前意識」…踊り子が出番を待っている舞台のそで（脇）、あるいはその周辺の状況。監督の指示があれば、いつでも舞台に出られる状態でバレリーナが待機しています。

「無意識」…踊り子たちの一部は、楽屋にこもってしまって準備をしているのか、休息をしているのか、わからないような状態です。ある踊り子は小部屋の中でなぜ自分を主役にしないのか監督に不満を持っているかもしれません。我慢して泣き寝入りしているのか、いつか舞台を混乱に陥れてやろうと悔しくて涙を流しているか、不満な踊り子を集めて別のグループを立ち上げてチャンスがあれば舞台を乗っ取ってやろうとしているのか、何をしているかわからないような状態です。

「抑圧」…不都合な考えや記憶を意識から排除して、無意識の中へ押し戻したり、閉じ込めようとする仕組み。とりあえず、健康そうに明るい人のように振る舞うには、嫌な考えや嫌な体験は忘れてしまってなかったことにしたい。はじめは舞台から追い出しただけで、舞台の袖にいるなあ、と気にはしていた。（まず「前意識」に追いやる。そのうちもっと嫌な経験をしたり、長い年月が経つうちに、最初からそんな経験はしなかったと感じるようになってしまい思い出すことも難しくなります。このことを「無意識の中に抑圧する」と言います。）

フロイトの考え…「“無意識”のあるところに“意識”をあらしめよ」 フロイトが医師として治療を始めたころのヨーロッパにはヒステリーの患者さんが大変多かった。まだ精神分析も心理療法も世の中に存在しなかった。ヒステリーの患者さんには催眠療法が行われていました。この頃のヒステリーの患者さんというのは、何か衝動を抑圧せざるを得ない生活を繰り返していて、例えば身体的な異常は無いのに、体の一定の部分が動かなくなってしまう、歩けなくなってしまう、といった症状に苦しんでいました。催眠による暗示が一定の効果をあげ、フロイトもフランスに行き、催眠療法の権威の先生の実際の治療場面を見学するなどして、催眠を学んだのですがそのうちに催眠によらなくても、どのような体験をしたか自由連想をするなかで患者さんがつらかった体験（隠していた体験）を言えるようになると症状が改善していくことに気が付き、「催眠」「暗示」に頼らず「自由連想」を軸とする治療―精神分析を確立していくようになりました。（催眠を行っている人たちは、人間に“無意識”があり、そこに暗示をかけることで治療ができると考えていました。）

つらい体験やいやなことがあっても、誰かが秘密を守ってくれて、親身になって相談してくれる、そういう人が定期的に会ってくれたら、精神的な病気にはかかりにくいのではないでしょうか。しかしつらい体験や嫌なことを話す相手もなく、一人心の中にしまっておくことが日常的に続いて、ため込んでしまったら、その人は精神的な健康を保つことは難しくなってくるでしょう。

「夢は無意識への王道である」とフロイトは言いました。夢はバレエの監督と舞台に出たバレリーナが去ったあとの舞台のようです。舞台に出られなかった不満を持った踊り子たちが、演技なのか練習なのか活動を始めます。それは筋書きがきちんとしていない、場面場面が断片的でどういうことなのかよくわからない表現になっています。私達にとっても目覚めたあと、あれは何の夢だったのかな、となかなか意味が分からないものですが、フロイトはたんねんに患者さんの夢の意味を拾い、日常生活との関連を調べていき、「夢の分析」には治療に結びつく意味があることを見出していきました。

「抑圧」と「無意識」の仕組みについて学ぶと、いわゆる「良い子」に振る舞うことを続けすぎると、どう

いうことになるか想像がつくようになります。厳格な大人の前では、子どもは多くの欲望や衝動を「無意識」に送り込まざるを得ず、知らず知らず不満分子を舞台裏に抱え込むことになっていきます。親の前では「良い子」だけれども、保育園では「～ができません」「～をしてしまいます」ということも起こりえます。さらにつらい体験をして、とても表舞台に出る踊り子を確保できない場合には、貧弱な振る舞いしか見せてくれず、このところ元気がないということがあるでしょう。また、さらに強いストレスがかかった時には、楽屋裏で数を増した不満を持つグループが舞台を乗っ取ってしまって、その子の表の人格とは違った人格を呈するような振る舞いをして、周囲を驚かせるといったことが起きるかもしれません。

B）エディプス・コンプレックス

これは人間が抱えがちな「心の葛藤」（コンプレックス）の代表的なものです。フロイトが発見し、ギリシア神話からその名称を取り、名づけました。

その基本テーマは、①異性の親に対して近づきたいという願望（男の子であれば母親を妻にしたい、女の子であれば父親を夫にしたい）、②同性の親との競争に勝ち、同性の親をほろぼしたいという願望、③これらの願望を持つことへの罪悪感、処罰を恐れる気持ち

の3つで構成されています。（注3）

①…例えば、２～３歳の女の子が無邪気に、「わたし大きくなったらお父さんと結婚する」などと言うことはしばしばあるのではないでしょうか。

フロイトは幼児の時、自分の父親がおじいさんのように見え、母親が兄よりも若いので、若い母親に対して特別な感情を持ったことを、自分の夢分析を通じて著作の中で触れています。

（フロイトが生まれたとき、父親は、ほぼ40歳・母親は20歳でした。）

フロイトは著作の中で、自分だけが醜いような恥ずかしいような心の動きがあったことを、高潔な振る舞いをしている人たちに発表するのはどんな気持ちになるか分かってほしいというようなことを書いています。

②…親が～の学校を出たから、親は～の地位に就いていたから、自分はそれ以上のところに行きたい。あるいは、親からさんざん「～でなくてはいけない」と特定の価値観を言われ続けてうんざりしてきたから、自分の思うように生きてこれなかったから、あえてその反対の事をして親を見返してやろう、親に仕返しをしてやろう、という気持ちになることはしばしばあるのではないでしょうか。親が困ることをして親に仕返しをすることで、自分が同性の親を上回る（同性の親の価値観を滅ぼす）ことになる、という生き方を選ぶ人もいるように思えます。

③…フロイトはウィーン大学での同僚との競争を経験しましたが、教授や先輩からまるで父親から受けたような圧迫、指導を受けました。のちに夢を見て、彼らを排除したいという願望があったことに気がつきました。ある教員の死後行われた記念碑の除幕式の日にそういった夢を見たのです。（相手をにらむと相手が消えてしまうという夢）

フロイトは子どもの立場から論じていますが、親の立場からは次のようなことが言えるのではないでしょうか。

ア…異性の子どもに近づきたいという願望（同性の子どもより、異性の子どもの方が可愛い。異性の子どもには甘いが、同性の子どもには厳しく当たる。）

イ…同性の子どもとの競争に勝ち、同性の子どもを滅ぼしたい。（母親が、しだいに美しくなっていく娘の姿に素直な気持ちが向けられなくなる。父親が成長した息子が自分より学歴が高くなってしまうと、何かにつけ、大学を出たのにそんなこともわからないのか、などと非難めいたことを言う。息子の成長意欲を滅ぼす。）

ウ…親が異性の子どもを支配したい、同性の子どもを圧倒したいという気持ちと行動の程度が軽いものであればともかく、ある境界を越えてしまった場合、社会から非難・処罰を受けるのではないか、という不安。そういう気持ちを少しでも抱いている自分に気づくことによる罪悪感。

エディプスの物語

ソフォクレスが『エディプス王』の悲劇に翻案したギリシャ神話は次のような物語です。

―― テーバイ国の王ライウスは、“生まれてくる息子はお前を殺すであろう”という神のお告げを受け、妻のイヨカスタが男子を生んだとき、この乳児を山麓に捨てて死ぬにまかせるよう従者に命じました。しかし乳児をたまたま発見した羊飼いは、乳児をコリント国のポリパス王のところに連れて行き、王はその子どもを養子にしました。（王夫妻に子どもがいなかったので）青年に達したエディプスは、コリント国を後にして放浪の旅に出ます。そして道が三叉路になっているところで出会った隊列と、どちらが道を譲るかでケンカになり、その隊列の主人らしき人を殺害します。この主人は名乗らなかったので、誰かわからないまま、エディプスは逃げました。

エディプスは次にスフィンクスと出会います。スフィンクスは、頭が人間で、体は獅子だという怪物です。スフィンクスはテーバイ国への道をふさいで、旅人に謎を出して、解けないと命を奪っていました。エディプスも謎を出されました。“朝は4本足、昼は2本足、夕暮れは3本足で歩むもの、それは何？”エディプスは謎を解き、スフィンクスは屈辱から自殺します。

テーバイ国の人たちは交通の要衝をふさがれて困っていたので、エディプスに感謝します。そして最近、国王が亡くなっていたので、エディプスを王として迎え、彼をイヨカスタと結婚させます。2人の息子、2人の娘をもうけます。

ところがテーバイ国に悪疫が流行し、神託によれば、ライウス王殺しが悪疫の原因であるとされます。そこでエディプスは犯人を明らかにして街を救おうと誓います。そこで隊列に一緒にいた者、乳児を拾ってコリント王に届けた者、山に捨てに行った者などの証言がなされて、その結果彼自身が、父の殺人者であり、母親と近親姦の罪を犯していたことを知ります。イヨカスタはすべてが明らかになる直前に自分の部屋へ行き首をつって死にます。エディプスは、彼女が着物をとめるために使っていたブローチで自分の目をえぐって

物を見ることが出来なくなります。そして諸国を乞食をしながら放浪します。彼の娘（アンティゴネー）が付き添って生活を助けました。最後はアテナイ国のコロヌスの森というところで亡くなります。

エディプスというのは“腫れた足”という意味。山に捨てられた時、踵にブローチが刺さっていて腫れていたから、そう名付けられました。

フロイトは自分の夢を分析する中で、エディプスの物語の中に描かれている、人類が共通して持っている願望、競争心、罪悪感をとらえました。フロイトは特に、子どもの立場から見て親に対する葛藤を主張したわけですが、親から見て子どもに対する葛藤も起こりえます。彼の後継者たちは、競争相手を滅ぼしたい気持ち、とそう思ってしまうために起こる罪悪感などから構成される葛藤を、ひろく“エディプス的な葛藤”あるいは“三者間の葛藤”として理解するようになりました。

同世代の「男性一人と女性が二人」の時に起こる関係、「先生一人と生徒二人」で起きる関係、「母親一人と子ども二人」で起きる関係、「上司一人と部下二人」で起きる関係、等々でも似たような現象が生じます。同じ立場の二人は競争し合い、相手に勝ちたい、自分だけが認められたい、そしてできれば相手を滅ぼそうという願望を抱きます。少しでも競争者が優位に立つと感じると嫉妬心が生じます。そして相手が失敗するとうれしくてたまらなくなります。仮に実行していなくても、こういう心の動きを持ってしまう自分に対して罪悪感を持ちます。こういう一連の心の仕組みを誰もが持っていることを、学問的にきちんと提示したことはフロイトの功績の一つだと思います。現代の映画など芸術作品にも大きな影響を与えています。

C）転移（投影同一化）

フロイトは先にも述べましたように、ヒステリー患者の治療を進めていくうちに、精神分析の基礎となる自由連想法を始めました。また無意識の探究が重要だと気づき、夢の分析も活発に始めます。1896年の「ヒステリー研究」公刊から、1900年の「夢分析」の発表にかけて、彼はウィーンにおける有力な“ヒステリー治療の研究者”であることから、“精神分析の創始者”“精神分析運動を始めた人”という立場に変身していくことになります。

また、フロイトはヒステリー患者との関係の中で“転移”（転移感情）を感知していきます。

精神分析の治療関係の中で、“あの時、あそこで、Dさんとどんなことがあって、それは貴方にとって、どういう意味があるのでしょう。また、Dさんに対してどんな感情が起きたのでしょう？”ということ（過去の感情体験）も扱われますが、“いま、ここで、治療者である私との間でどんな感情が起きていますか？”ということ（たった今の感情体験）も自由連想の中では出てきます。

週に何回も会って、非常にプライベートな話を続けていくと、ある意味とても親密な関係ができあがり、一定の感情を患者さんが治療者に向けるようになります。これを“転移”と言います。もともと生活史の中で患者さんが、身近な人に向けていた態度・振る舞い・感情などが治療者に向けられます。（もともと持っていた感情などを、別の人に向ける、場所を変えるという意味で「転移」と言います。また、「同一化」というのは、自分の心の中の内容＜ある人物への感情、その人物との関係の取り方、役割パターンなど＞を相手の心の中に投げ込んでしまって＜投影して＞、その人物と同一視してしまうことです。投影同一視とも言います。強力な投影同一視（化）が働いている場面では、それを向けられる相手は窮屈で自由に動くことや考えることができなくなったと感じます。そして不本意ながら、相手の注文にはまったような言動を強いられることになっていきます。）

・陽性の転移…＜例＞患者さんから見て、治療者は信頼が置け、きっと難しい問題でも解決してくれる。それは自分の親が（または、親代わりをしてくれたＥさんが）してくれたように。だから、Ｅさん（または親）に対して私は良い子として振る舞っていたから、いま治療者に対して良い患者として認めてもらえるように振る舞わなくてはならない、などといった感情が湧きます。実際の症状はそれほど良くなっていないのに、面接室では治療者の言うようにしたらこのように改善したなどと、振る舞ってしまうことがあります。そんな回が何か月も継続すると、治療は深まらないことになります。

私たちの現場では、「万事うまく行っています」と良いところばかり見せるのですが、本当は困りかけているのに、はっきりとは意識できないでいる人と出会っている状況に近いのかもしれません。

・陰性の転移…＜例＞患者さんから見ると、治療者は自分にとってつらいしつけをして、守ってほしい時にちゃんと守ってくれなかったＦさんに似ている。治療にきちんと来なさいとか、約束の時間を守ってくださいというのは、厳しかったＦさんに似ている。そのくせ治療者は学会があるのか、個人的な用があるのかわからないが、自分の都合で治療頻度を守っていない。私が話を聞いてほしいとき（守ってほしい時に）そうしてくれないのなら、私も自己の都合で～してやろう、などとマイナスの感情を向けてしまうことがあります。

私たちの現場では、こんな例が考えられます。職員としては他の人と同様に接しているつもりなのだけれど、何故か注文や不満を向けられることが多い。過去には苦労されたことが多かったようだけれど、その時の不満（過去の不満、抗議できなかったモヤモヤした感じ）を、たまたま今会っている、私に向けているのではないだろうか、と思わせるような状況が相当するかもしれません。

そのうちに転移の研究に関しては、患者さんだけではなく、治療者も患者さんに転移感情を向けることに気づかれるようになりました。治療者側が向ける転移を“逆転移”と言います。

やはり、“陽性の逆転移”と“陰性の逆転移”があります。治療者が十分トレーニングを受けていないと、自身の逆転移をうまく扱えず、治療が停滞したりうまくいかなくなることも考えられます。（なぜ自分はこんなにあの患者さんのことを好きに、あるいは嫌いに感じるのだろう。それは、自分が小さかった時、今の患

者さんと似たところのあるGさんとの関係＜過去の感情体験＞が未整理になっているからだろうか、などと振り返るといったことが必要になります。自分できちんと逆転移感情に気がついて整理していくか、あるいはスーパービジョンを受ける、といったことが必要になります。）

フロイトは転移が生じるのは、自由連想を妨げる困ったことだ、とはじめは思っていましたが、のちに彼はむしろそれを通じて患者さんの精神内界を理解することに意義を見出して行きます。

治療者は逆転移感情をいけないもの（患者さんを“好き”になってはいけない、あるいは“嫌い”になってはいけない）と感じて抑圧してしまうのではなく、なぜこういう感覚にとらわれてしまうのか、ということをしっかり意識することで、患者さんの生活感覚、対人関係の持ち方をとらえる手がかりとすることができます。ですから、フロイトの後継者たちは、精神分析においてどのような転移が、どちらの側から表現されていて、相手方がどのような影響を受けているかということに感覚を開放して接するのが良いと言うようになりました。そして治療者は、治療関係で起こるあらゆる転移現象を拾い集めます。言語によるもの、立ち居振る舞いによるもの、作品・プレイ・夢の報告などで表現されるものなど。

精神分析の後継者の一人である、ポーラ・ハイマン（1899～1982）が1950年に「逆転移」という論文を発表。治療者の逆転移が患者さんの内的世界に関する重要な情報源となりうるということを初めて述べました。フロイトも、ハイマンの師であるクラインも、あくまでも逆転移は“治療者の精神病理の現れ”だと考えていました。ハイマンは、治療者が起こしている“逆転移は、治療者自身の未解決な葛藤に関するものだけでなく、患者さんによってもたらされる健康な逆転移もある”と説明しました（注2、3）。

拾い集められた転移の山の中から、治療に結びつく言葉（解釈）を効果的に用いられるのはいつかを推し量ります。もちろん十分な信頼関係ができてからのことです。解釈が浮かんでもそれを話すタイミングなどを誤ると、時には患者さんを深く傷つけてしまうこともあり得ます。フロイトは慎重さに欠ける解釈投与を「ワイルド・アナリシス」（野蛮な分析）と呼んで弟子たちを戒めていました。

解釈を伝えたところ、すぐに患者さんが軽い“陽性転移”の反応を返して来たら、早すぎたのかもしれません。その日は否定されても、何日かたったところで「あの言葉は何か考えさせるところがあった、まだ完全には納得できてないけれど…」と言葉を選びながら話してくれたら、意味があったのかもしれません。

変容をひき起こす解釈（治療に結びつく解釈・語りかけ）が何か、どんな言葉が穏やかで、力強く効果的なのか、分析家たちはそれを日々の分析という患者さんとの共同作業で追い求めています。

私たちの現場では、毎日「純金」の精神分析を行っているわけではありません。精神分析的な知見を手掛かりに仕事をしようとしても、かなり薄めの「合金」というのが現実です。でも毎日、保育や療育で出会う子ども達とは、1対1ではないけれど、やはり何らかの転移感情のやりとりをしているわけです。定期的に会う親子のペアとは、それなりに親しい関係が少しずつできあがっていくこともあり得ます。ですから、自分がどんな逆転移感情を、どんなタイプの子、親子に持ちやすいのだろうと考えておくことは大切なわけです。また、担当する子ども一人一人に、この子は私にこういう感情を起こさせるけれど、それはこの子の持つ個性か生活史かどこから来るのだろう、と考えておくことはスムーズに療育活動、対人支援活動をする人には必要なことだと思います。

私たちの仕事における日常は、一度に何人もの子どもたちを見て、何人かの職員でプログラムをこなします。そこでは誰が誰に対して、どんな転移感情を向けているでしょうか。強く人の心を揺さぶり、動かしていく力を持つ出来事の原動力はやはり何らかの転移から生じているのでしょうか。今この保育室で新たに生じた出来事（感情を揺さぶる体験）に立ち会った子どもたちは、この体験をどのように次の生活場面で、別の人間関係で転移していくのでしょう。毎日の保育室で起きる転移の数はあふれるほど生じています。（職員間でも、子ども同士でも起きています。）職員の側からも、子どもの側からも。何とか重要と思われる転移は拾い上げたいものです。

5.「ごんぎつね」における転移（投影同一化）

P２…お城にお殿様がいるという時代設定であり、主人公の「ごん」はひとりぼっちであることが語られます。ひとりぼっちなので大人に注目してもらいたい子どもの日常生活が描かれています。衝動的に動いてしまって、生活の場のルールを守らない、好奇心の強い子どもが登場しています。

P4…環境の変化が、非日常的なことが起こる前触れとして示されています。でも、もずは鳴いて、ススキの穂は光って「ごん」の暮らしを支える自然の姿は美しい。「ごん」が一人ぼっちになる前に、一緒にすごしていた「ごん」の母親もきっと美しい姿だったのでしょう。
（一般に、子どもが両親に良くしてもらった思い出は、美しい故郷の姿と同一視される。）

P6…「ごん」と兵十の出会い。まだ「ごん」の関心は兵十にそれほど向かっていません。

P8　…やはりいたずら好き、好奇心の強い子どもの姿が描かれています。それも単にいたずらをしているわけではなく、二度とビクに入らないよう、ビクよりも下手に投げ込んでいるわけですから、小さい命を救おうとしているわけです。ここでは弱い小さな生き物としての自分の立場が、魚たちの捕まえられている姿に投影されています。
（ごんは自分の立場や感情を、捕えられた魚たちに対して、それと知らずに投影しているという言い方ができます。あくまでも、投影・転移という言葉を用いる練習としてですが。）

P10　…うなぎは「ごん」に食べられたわけではなく、草の葉の上にのせられました。兵十の言うような盗人ではなく、自分の姿を投影した小さな命をできれば救いたかったようです。

P12…この狐は村の祭りや葬式について良く知っています。ですから、ずっと村に住んでいる小学生くらいの子どものようです。

P14…もっとも美しく印象的な場面です。赤い彼岸花、白いかみしも、鐘の音、葬列の動きなどが立体的、動的に描かれています。兵十の母親の死が描かれています。「ごん」はすぐにそれを理解します。「ごん」も母親を亡くしているのですから。ここから、自分と同じ体験をした兵十への思い入れ（転移・投影同一視）が始まっていきます。

（絵本という枠をとびだして言えば、南吉が幼くして母親を亡くしているその思いが、絵本の登場人物に投影されています。）

P16…ここでの「ごん」は衝動的に動いてしまう子どもの姿ではありません。「ごん」の心の中では“心的空間”が広がっています。（「Hさんが I くんのことを～と思うことについて、自分は○○だと考える。」という他者の気持ちを察して自分の考えや行動を言語化するには、その子どもの心に“心的空間”が形成されることが必要だと精神分析理論では考えられています。）

「ごん」は兵十に強く同一化し、陽性転移を向け、それに基づく行動が盛んになってきます。転移は強力になると、もしかすると実際はそうでなかったかもしれないのに、妄想的に思考が発展してしまっていることもみられるようになります。「～だったにちがいない。…ウナギが食べたいと思いながら死んだんだろう。…」

P18…兵十は別に寂しいと思っていないかもしれません。「ごん」は自分の感情体験を麦をとぐ兵十に転移しています。

P20…喪失体験と罪悪感、罪悪感に対して償いをする、という流れが描かれています。

（一般に、子どもは近親者を喪失すると、客観的には子どもに落ち度はないのに、自分がわがままを言ったから、お母さんを困らせて、お母さんが病気で弱って死んでしまったんだ。お母さんを死なせてしまった自分を罰して、死んだお母さんに償いをしなければならない。という心の流れが起きます。）兵十への強い思い入れのために、（自分のお母さんに償いをするかのように）兵十に対する償いを始めます。

P22…「ごん」は、母親を失って傷ついている子ども（兵十）が、さらに頬に傷つけられているのを見て「かわいそうに」と思っています。ここでは“まるで子どもの世話をするような”「ごん」の中の“母親的な心”が動いています。

P24…あの好奇心の強い、いたずらばかりしていた「ごん」は人が変わったように、償いの行為、兵十への世話焼きを続けます。「ごん」の心は兵十への陽性転移感情でいっぱいになっていて、他のことは考えられないくらいです。

P26…兵十からのリアクションを気にしている「ごん」の姿です。兵十に認めてもらいたい気持ち、償いが功を奏したらいいのにという期待が込められています。

P30…兵十への思い入れは片思いだということがわかり、がっかりしています。

P32…片思いだということがわかったけれど、なお兵十に尽くしたい「ごん」。もちろん兵十に認められたらうれしいけれど、「ごん」を突き動かしているのはもっと大きな転移の力かも知れません。「ごん」が以前に経験した喪失をいやすために「償い」をしていたので、たとえ片思いでもやめられないところに来ていたのかもしれません。

P34…ついに自分の「死」を持って、兵十へ苦しい片思いが成就する場面。さらに「ごん」という子どもが大人に認めてもらいたい気持ちが、また「ごん」が以前に喪失した自分の母親への償いの気持ちなどが成就しています。

（絵本をとびだして言えば、南吉自身が幼児期に失った母親への気持ち、罪悪感や償いたい気持ち、あるいは母親と同じ世界に行きたいといった気持ちなどが、この場面に込められているかもしれません。）（注４）

引用・参考文献

（1）「新編　新美南吉代表作集」半田市教育委員会　図書印刷株式会社　1994
（2）「対象関係論の系譜」 飛谷　渉　東海中部精神分析セミナー講義　2012
（3）「私説　対象関係論的心理療法入門」 松木邦裕　金剛出版　2005
（4）「ごんぎつね」作・新美南吉　　絵　黒井　健　偕成社　1986
上記のほか、
「新美南吉」 編集・発行　新美南吉記念館　　2000
「新美南吉生誕百年」 新美南吉記念館　2013
「手ぶくろを買いに」 作・新美南吉　絵　黒井　健　偕成社　1988
「素顔の新美南吉」 著者　斉藤卓志　風媒社　2013
「『ごん狐』の誕生」 著者　かつおきんや　風媒社　2015

※本論は平成29年11月17日に行われた名古屋市西部地域療育センター連続講座でお話した内容を一部修正加筆しまとめたものです。

平成30年度 西部地域療育センター連続講座のご案内

（定員になり次第締め切ります）

第1回　講演会

講　師　名古屋市立大学大学院　坪井 裕子 先生（臨床心理士）
仮題「発達障害の子どもと家族支援を考える」
日　時　平成30年6月22日（金）PM3：30～5：00
会　場　西部地域療育センター１階　多目的ホール
対　象　保育園、幼稚園、小学校、療育施設、関係機関の職員のかた

体験型講座

講　師　はこ心理教育研究所　亀井 敏彦 所長（臨床心理士）
「クレイワーク（粘土遊び）から子どもを理解する」
日　時　平成30年７月31日（火）AM10：00～12：00
会　場　西部地域療育センター2階　会議室
持ち物　汚れてもいい服装。粘土代(300円)は実費でいただきます。
対　象　保育園、幼稚園、児童発達支援事業所の職員のかた

通園部一日体験

日　時　①平成30年8月21日（火）
②平成30年8月23日（木）
③平成30年8月28日（火）
④平成30年8月30日（木）
会　場　西部地域療育センター内通園部「キララ」
対　象　保育園、幼稚園、児童発達支援事業所の職員のかた

療育グループ体験

日　時　①平成30年7月23日（月）
②平成30年7月24日（火）
③平成30年7月25日（水）
④平成30年7月26日（木）
会　場　西部地域療育センター療育グループ
対　象　保育園、幼稚園、児童発達支援事業所の職員のかた

ボランティア募集

保育場面での手助け（室内の活動、園外への散歩など）
教材づくり
保護者活動時における療育児のきょうだいの保育
センター行事（運動会、夏祭りなど）のお手伝い
その他、園の環境整備など

■お問合せ・お申込み■
名古屋市西部地域療育センター

名古屋市西部地域療育センターだより　第38号
発　行　日　2018年4月
編集・発行　**名古屋市西部地域療育センター**
〒454-0828　名古屋市中川区小本一丁目20-48
Tel.（052）361-9555　Fax.（052）361-9560

この機関紙は古紙パルプを含む再生紙を使用しています。